
きっと空は繋がっているから

桜の木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつと空は繋がっているから

【Nコード】

N7820X

【作者名】

桜の木

【あらすじ】

いつものように親友三人と一緒に小島へ行って遊んだりするつもりだった。

だけど、3人はいつの間にかいなくなってしまう。

それからだ。俺の頭の中に三人の様子が夢に出てくるようになったのは

これは、三人の帰りを待ち続ける少年の物語

(前書き)

初めまして、桜の木です。

今回はある程度まとまった短編小説を投稿いたします。

初めての作品ですので、至らない部分が多数ありますが、温かい目で閲覧お願いします。

注意

この作品には、オリキャラが出てきます。ご都合主義です。原作崩壊かもしれない。

それでもいい方は、どうぞ

「うん．．」

窓から差し込む暖かな光で、少年は目を覚ます。

寝ぼけ眼をこすりながら着替えを済ませ、洗面所で顔を洗い、リビングのテーブルに用意された朝食を食べる。

「もぐもぐ．．おっと、そろそろ時間か。母さん、今日も行くる！」

キッチンの奥から「あまり遅くならないうちに帰って来なさいよ」と言う母親の声を聞きながら玄関を飛び出す。

道行く人に挨拶をしながら少年は海のほうへ走っていた。

波の音が次第に大きくなり、浜辺へとたどり着くと少年は真っ先にボートへ飛び乗り、オールを力強く漕ぎ出す。

本土から少し離れた場所にある小島、昔は漁師が仕事場として利用していたらしいが、今では島の子供の遊び場になっている。

小島へ到着すると、大きなヤシの木に座り持ってきたノートとペンを鞆から取り出す。

何か書くのかと思いきや、少年はヤシの木に身を預け瞼と閉じてしまった。

一見普通の人からは昼寝をしているように見えるこの行動、でもこれにはちゃんと意味がある。

誰も信じてくれないけど俺は、行方不明になった親友の様子が夢と
なって見えるんだ。

もう、半年くらい前のこと、いつものように一緒に島で遊んでいた
ソラ、リク、カイリ。この三人がある日突然いなくなった。

何があったのか、どこへ行ってしまったのか誰も知らない。三人の
母親は今でこそ笑顔を見せているが、ずっと泣きっぱなしの日々を
送っていた。

最初は俺も悲しかった。毎日泣いてたし、学校にも行きたくなかつ
た。今思うとあの三人は俺にとって太陽のような存在だったのかも
しれない。

俺は今でこそちゃんと学校へ通っているが、昔はそうじゃなかった。
人と関わるのが苦手で、学校でも一人だった。そんな俺の最初の
友達、三人の中で最も馬鹿だけど、いつも楽しそうに笑っている
ソラだった。

休み時間の間も一人で本を読む俺に「なんの本読んでんの?」「面
白いのか?」などとどうでもいいことを言っていたのも俺にかまって
きた。それだけではない、屋上でお昼を食べる時も、授業中も、放
課後もずっと話しかけてきた。

俺は、戸惑いながら「なんで俺に構うの?」と尋ねた時のソラの返
答を今でも覚えている

「友達になりたいからだよ。だって、ずっと一人でいるお前を見て
ると俺も悲しくなってくるんだ」

その一言が俺の生き方を変えるきっかけとなり、今の俺がある

それからの日々が楽しくてしょうがなかった。みんなでボール遊びをしたこと、チャンバラごっこをしてカイリの手作りクッキーを取り合ったこと、いかだを作って外の世界へ行こうとみんなで決めた時のこと、すべて昨日のことのように覚えている。

だから、夢の中でソラ達の様子が見えるようになってから毎日欠かさずこのノートにソラ達の出来事を記録している。

三人が戻ってきた驚かせてやるんだ。お前達の行動は全部知っていたんだって言った途端、驚き慌てふためく姿を想像すると思わず笑いがこみあげてきてしまう

今日は、どんなことが見えるんだろう。真っ暗な世界の中で光が差し込むのを待ち続ける。

日がすっかり暮れ、赤い夕陽が海を赤く染め上げる頃、少年はゆっくり瞼を開いた。

「ん・・・もう夕暮れか。っと、忘れないうちに書かないと」

ペンを流れるように走らせ、あっという間にノートの半ページを文章で埋め尽くしてしまう。

それから10分ほどノートに書き続け、ペンがやっと止まった。

ノートとペンをカバンにしまい、いかだのほうへ向かう前に少年は、ふと空を見上げる。

夢で見ていることが本当なら、あいつらは元気でやっている。リクは・・なんだか悪い奴らと関わったみたいだけど、しっかり者のリクのことだきつとすぐに自分の過ちに気づいてくれるに違いない。

そして、夢に出てこないカイリ。心配なのは確かなんだ。でも、いつもの彼女を見ているせいかな、持ち前の明るさでどこかの街の子供たちをまとも上げている光景が浮かんでしまう。

なんて思いながら空を見上げていると、ふと随分前にソラが言っていた言葉を思い出す

「なあ、空ってなんでいろいろ変わるんだと思う？」

「え・・さ、さあ？ どうしてだろう。気温とか気圧の関係かな」

「んーとね、俺が思うに空っていろんな人の思いが繋がっているからじゃないかなって」

「どういうこと？」

「だって、この世界にも空があるんだ。きつとどの世界にも空があって、それで、いろんな人達が空に向かってお願いをするんだ。だから、誰かが悲しいと雨が降って、元気になると雨が止んで虹が出る。流れ星とかがあるんだからたぶんそうじゃない？」

「うーん、科学的な根拠はないけどどうしてだろう、そうかもしれないって思うよ」

「だろ！ やっぱり俺って天才かな」

勉強ができないで、いつも遊ぶことしか頭がないソラが言った唯一

真面目な言葉である。

漫画の読みすぎとも思われるこの言葉、嘘か本当なんてどうでもいい。

ただ、もしも本当に思いが繋がるのなら俺の声を、思いを聞いてほしい。

「ソラ、リク、カイリ・・・お前たちがいなくなってから、みんな退屈そうにしているんだ。ティーダ達も毎日飽きずにやっていたチヤンバラをあんまりやらなくなっちゃまって・・・みんな、心配している。怒ってる。

だからさ・・・元気で帰ってこいよ！じゃないと俺がぶつとぼしてやるからな！」

思いついた限りのことを空に向かって叫んだ。

ぶつとぼすなんて言ったらソラやリクが飛び掛かってくる姿が浮かび、思わず笑みを浮かべる。

届いているなら今すぐにでも帰って来い。そんなことを思いながらボートを漕ぎだし、小島を離れていく。

いや、届かないはずなんてない。なんて言っちゃって、どの世界の空もつながっているんだからな。

そうだろ？ソラ

(後書き)

どうでしたか？

まだ慣れないのでおかしいかもしれませんが、僕なりに書きました。

こんな作品を見てくれたユーザーの方に感謝です。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7820x/>

きっと空は繋がっているから

2011年11月15日03時02分発行